プリムラー行冥界旅行記

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリムラー行冥界旅行記

【Nコード】

N4473Y

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

冥界を旅行するプリムラー行の話。好き勝手やりますのでそれが嫌な方は読まない方がいいと思います。

ギルド

冥界に到着して早一ヶ月。街の風景なんかはあまり変化はなかった。自然も同じように。

今はデイライカの街の宿にお世話になっている。プルートの家でも良かったけど、それだと移動中の楽しみなんかが無くなるから、止めておいた。

当面は、この街で過ごすつもりだ。

で、今あたしとエリーがいるのはギルド（数人が一つのグループとなつて仕事なんかをする）場所の本部みたいな所。あたし達が向こうにいる間に出来たみたいで、プルートの許可とかいらないのかな？と思つて本人に聞いてみたら

『我は基本そういうたものに関わらない。最低限の規律さえ守ることが出来るのなら、何をしても自由だ』

とのこと。

確かにそうだよな。

で、そのプルートは家に戻っている。なんか、次にあたし達が行くまでにリフォームするとか言ってたけど、必要あるのかな？

みんなは観光とか修行とか自分のやりたいことをやっている。なにかしなければならんっていうのがないから、こっちに来てからのみんなはすごく活き活きしている。レイアなんか毎日駆け回ってるし。偶に転けてはジュードにお小言を言われているけど……。

まあ、みんなのことは追々話すことにして……。

「今日はどうする？」

「うん……戦うのは今のわたしだと難しいし」

戦いの後、エリーはティポを部屋にある宝箱の中に納めた。ティポも納得していたし、エリーも自分の思ったことは、素直に自分と言えるようになったから。だから、今のエリーでは自身が持っている力を制御できない。そんな状態で戦うのは危険だ。

まあ、冥界に来たのはあくまでも旅行で、戦闘なんかをするつもりはないから何の問題もないけど。

「じゃあ、お手伝いする？ほら、庭の草むしりとか部屋の掃除とかあるけど」

クエストボードの中間辺りに2枚の紙があつて、そこにはそれぞれ、『庭に草が生えすぎて困っています。どなたか手伝っていただけませんか？』『整理するのが苦手ですぐに散らかしてしまいます。片付けを手伝ってくれませんか？』と書かれていた。

「うん。でも、届かないよ？」

エリーの言うとおり、紙が貼つてあるのはボードの中間辺りだけでなくにせボード自体が結構大きいんだよね……。いすに登ろうにも近くの席はどれも埋まつてるし……お？

辺りを見回していると、長い黒髪で背も高い青年を見つけた。剣を

腰に差さずに左手に紐を巻き付けてぶら下げている。近くには赤髪の少女とミラに劣らない体型の蒼髪の女性がいて、なにか話している。

「エリー、あの人に頼んでみよう？」

「え？大丈夫なの？前は断れたよ？」

ここに集まっている人たちは殆どが、自分達の利益になることしかないから、頼んでも断られることが多い。どころか横取りされることだってある。今の所は断られるだけで、横取りなんかはされていないからいいけど、多分その内あるだろうな……。

「ダメ元で頼んでみよう？断れたらその時はその時だよ」

そう言ってエリーの手を引き黒髪の青年に近づいた。

「あの」

「だから……ん？俺か？」

「はい、えと少し頼みたいことがあるんですけど良いですか？」

「あら、可愛い娘たちね」

「あなた、なにかしたの？」

「してねえよ。それで、なんだ？仕事か？」

「いえ、ちょっと紙を取って貰いたくて」

「紙？ああ、クエストのやつか？」

「はい、そうです。あたし達じゃ届かなくて」

言つと青年と後ろの2人は確かにと言つた感じで納得して、紙を取つてくれた。

「ほれ。他の奴の仕事に口出しするつもりはねえけど、こんなんでいいのか？討伐とかの方が報酬は高いぞ？」

へえ、分かるんだね？

「ありがとうございます。いいんですよ、そもそもこっちに来たのはあくまで旅行ですから」

「ていうか、こんな小さな娘たちが戦える訳ないじゃない」

「いえ、戦えますよ？わたしは今は無理ですけど、プリムラは結構強いです」

「だとよ？それに、それを言ったら、パーティとカロールだってそうだろう？パーティは若返つてるだけだが」

若返つた？そんな薬でもあるのかな？

「・・・そういえばそうね。ねえ、あなたいま何歳なの？」

「最近12歳になりました。あ、ついでに自己紹介もしておきますね？あたしはプリムラです」

「わたしはエリーゼ・ルタスです。よろしく願いします」

手を前に揃えて頭を下げるエリー。シャルル家にいるときに、クレインから教わってたっけ？似合ってるな……。

「礼儀正しいわね。貴方も少しは見習ったらどうかしら？」

蒼髪の女性が青年にそう言った。

「はいはい。俺はユーリ。ユーリ・ローウェルだ」

「私はジユデイスよ」

「あたしはリタ・モルディオ。今はいないけど後、5人と1匹、仲間がいるわ」

「匹？人じゃないのかな？」

「ユーリさん達もギルドなんですか？」

「さんはいらねえよ。後敬語もな。お前の言つとおり俺たちもギルドだ。名前は『凜々の明星』フレイブ・ヴェスベリアつてんだ」

「へえ〜……なんか、格好いいね？」

「サンキュ。名付け親が聞いたら喜ぶだろうぜ」

そういつてユーリは小さく笑った。

その後、あたし達が滞在している宿を教えて、ユーリ達の家も教えて貰った。なんか、みんな纏めて一緒に住んでいるらしい。賑やかそう。レイアとかすぐにうち解けるかも。

「ま、頑張れよ？」

「それじゃあ、また会いましょう？」

「変な奴にはついて行ったらダメよ？」

ユーリ、ジュディス、リタの順で言っ、3人は出口に向かっていった。それとは入れ違いにミラが中に入ってきた。あたしたちを見つけてボードの所まで来る。

「今、なにか不思議な者達とすれ違ったのだが・・・」

「不思議、ですか？」

「ああ、なにか四大に似た力を感じた。なんだろうか？」

四大精霊と似た力？何だろう？

「まあ、いいか。何か仕事をするのか？」

ミラが考えるを中断してあたしが持っている紙を見た。

「うん。庭の草むしりのお手伝い。ミラは？」

「私は宿にお前達がいなかったらここに来ただけだが、ちょうど良いし、手伝うでしょう。すぐに行くのか？」

「うん。今から向かうと」。エリーもいい?」

「うん」

「では行くのか?」

「はい」

それから依頼主の所に向かつて、家に着いた時、犬の鳴き声が聞こえた。見てみると、大きな犬があたし達を見ている。

青と白の体毛に、長い尻尾。左目に大きな傷があつて、口にはキセルを咥えている。喫煙は二十歳になつてからだよ? 飲酒もね?

犬はゆっくりと近づいてきて、エリーは少し怯えている。

「大丈夫だよ? エリー、この子に敵意はないから。ね?」

「わふ」

あたしの方からも近づいて、その頭を撫でると尻尾を揺らして擦り寄ってくる。エリーもそれを見て怖くないと分かつたのか、近づいてきた。

「随分と大きな犬だな」

ミラが率直な感想を言った時、家のドアが開いて

「お? 珍しいな、ラピードが初対面の奴にそこまで懐くなんてのは」

ついさっき別れた、ユーリがそう言いながら出てきた。

「えっ？」

「じつはユーリ達の家なの？」

四大精霊と四大精霊・1

「お疲れ様でした」

そういって、ピンクの髪の少女、エステルがあたし達の前に紅茶を出してくれた。お礼を言っ、一口含むと、じんわりと温かさが広がっていく。ローエンの紅茶も良いけど、エステルの紅茶も美味しい。

隣ではエリーが金髪を三つ編みにしている海賊服を着た少女、パティと楽しそうにおしゃべりしている。草むしりの時も途中からパティが参加したけど、すぐにうち解けていた。

ミラは金髪の青年フレンと風来坊って感じのおじさん、レイブンと何か話している。ちらっと聞こえたけど、なんか子どもがどうとか言っていた。まあ、こっちも楽しそうだ。

「プリムラはどこから来たの？この街じゃみたことないけど」

そう聞いてきたのは髪をオールバックにして、でかい鞆を提げている少年カロール。年はあたしの一個上らしい。で、凜々の明星の首領。

「あ、わたしも聞きたいです。遠い所から来たんですか？」

エステルも興味を持ったのか座りながら参加してきた。

「まあ、遠いと言えば遠いのかな？でも近いと言えば近いよ？あ、そういえば、あたしも聞きたいことあったんだ。ねえ、ユーリ？」

ラピードのブラッシングをしているユーリに呼びかけると手を止めないまま返事を返してきた。

「さっき、ユーリ達ギルドから出るときにミラとすれ違ったのは気付いてた？」

「ん？ああ、あれミラだったのか」

「その時にね？ミラが四大精霊に似た力を感じたって言ってたんだけど、何か知ってる？」

「な！どうして分かったのよ！」

答えたのはリタだった。かなり驚いているけど、知られたらまずいのかな？

「リタ、落ち着け」

「あ……」

「で？リタの言うとおり、どうして分かったんだ？」

ユーリがリタを宥めて、改めて聞いてきた。

「分かったのはミラなんだけど、ミラはね精霊の主なの。地のノーム・水のウンディーネ・火のイフリート・風のシルフを従える、精霊の主」

「ちょっとちょっと……それ本当なの？」

「ああ、確かだ」

「ミラはすごいもの！」

「けれど、それを実証は出来るのかしら？」

「あゝ・・・ミラ、こっちでもみんなは呼べるの？」

「そういえば・・・分からないな。試してみるか。皆少し離れていてくれ」

立ち上がって、レイブンとフレンが離れたのを確認してから、ミラは空中に陣を描いた。

「はっ！」

キン！

甲高い音が鳴り、直後

ぶわぁあああああ！

「これって！」

「マジかよ・・・」

そこには四大精霊がいた。

四大精霊と四大精霊・2

「お前がこちらでのイフリートか？なかなか燃えているな？」

「うぬこそ、大した物だ」

イフリートとイフリート。

「こっちでは何かが起きたりしたでしか？」

「きゅ〜」

ノームとノーム。

「やはり水はいいですよね？」

「そうだな」

ウンディーネとウンディーネ。

「.....」

「.....」

グッ！

シルフとシルフ。

なんで手を取り合ってるんだろう？あれかな？お互い小さいから安心したのかな？

「なんていうか、すごいわね・・・この光景」

「ええ、四大精霊と四大精霊が一堂に会するなんて」

レイブンって時々女言葉使うから文章だけだと判断するの難しいよね・・・ん？文章？なに言ってるんだろう、あたし。まあ、いいや。

「ミラはどこであいつらと会ったんだ？」

「どこでもなにも、私は生まれた時からずっと四大と共にいたぞ？すこし厄介なことがあって、一時期離れた時はあったが、それを除けば片時も離れたことはない」

確かに、あたしが知っているだけでも、クルスニクの槍に捕らえられている時以外はいつも一緒だったっけ。2年前もそうだったし。

「なにやら大変だったようじゃのう？」

「うん、でもそのお陰で、わたしはプリムラと逢えたから」

「へえ・・・それなら、悪いことばかりじゃないんだね？」

「はい」

フレンの問いかけにエリーは笑顔で答えた。

その後、何がどうなったのかどっちの四大精霊の力が強いかわかることになり、庭に集まった。

「比べるって言っても、どうやって比べるの？」

「簡単よ。おっさんに一斉に攻撃してダメージが大きかった方の勝ち」

「……ん？ちよっと！それおっさん死んじゃうでしょ！？」

「大丈夫よ。ギャグ補正がかかるから精々丸焦げになるくらいだし。次の話の時には治ってるから」

「ねえこの天才魔導少女はなに言ってるの？」

「俺に聞くな」

「きつとなにか入ってるのね。覚悟を決めたらどうかしら？」

「ジュデイスちゃん！絶対面白がってるよね！」

「ええ」

にこやかに肯定するジュデイス。まあ、結局その後、レイブンに一斉攻撃することになった。

逃げられないように木に磔にして準備完了・・・って、みんな結構酷いね？

「そんなじゃ、まずはミラからな？よいい、始め！」

「ゆくぞ！」

「ちょっと！本当にやるの！？」

「始まりの力！手の内に！我が導となり！こじ開ける！スプリームエレメンツ！」

四属性の力がレイブンを襲いかかる。

「ぎゃあああああああ！！！」

煙が巻き起こり、収まった時にそこにいたのはぼろぼろになったレイブンと傷一つ付いていない木だった。木、凄いな・・・。
で。

「また今度ねー！」

「うん！いつでも来なよ！」

「またなのじゃー！！！」

結局またの機会にすることになって、あたし達は宿に戻った。

お兄ちゃんとお姉ちゃん

宿に帰ると、ジュードとレイアが帰ってきていた。お昼ご飯を食べているようで、テーブルの上にはいくつかの料理が並んでいる。

「ジュード、レイア、お帰り」

「あ、プリムラ。ただいま、それとお帰り」

「なにか面白いこととかあった？わたしたちは特に目新しい物は見つからなかったけど」

レイアはずっと駆け回ってたでしょ？とジュードが言うとレイアは頬を膨らませた。それがまた可愛くて、あたしは笑っていた。

「エリー、ミラ、あたし達もなにか食べようか？」

「うん」

「そうだな」

2人と一緒のテーブルに着いて、それぞれ食べたいものを注文して、昼食を賑やかに食べた。途中でシャドウとセルシウス、ヴォルトが帰ってきて、ルナはと聞こうとしたところで、シャドウの背中で寝ているルナを見つけた。

「結構はしゃいだみたいだね？」

「ああ。こつちも疲れたよ」

「楽しんでた癖に」

「……………まあな」

「ボク達も楽しかったよね？」

「ええ」

シャドウもセルシウス達みたいに素直になつたらいいのに。ルナはただでさえ、離れていた分もあつて、まだまだ遊び足りないんだろうし。多分、寝るまで遊んでも明日には完全復活してるよ。

「頑張つてね？お兄ちゃん」

「……………なんかちょっと回復した。何かは分からないが、何かは回復した」

シャドウはこれで明日も頑張れるとか、お父さんみたいなことを言いながら、2階が上がっていった。

「プリムラのお兄ちゃんにはそんな効果が」

「ないと思うよ？」

「じゃあ、ジュードが試してみなよ。プリムラ、やっちゃって！」

やるって何を？

「まあ、いいけど。それじゃ・・・こほん」

「プリムラ？やりたくない「ジュードお兄ちゃん？」・・・」

見上げながら言ったら何故か動きが止まった。

「あらら、効き過ぎちゃったかな？」

「プリムラ、なにかしたのか？」

「ううん」

みんなには背を見せて言ったけど、実際あたしは何もしてない。

「じゃあ、プリムラ、次はエリーゼをやっちゃって！」

ビシッ！と効果音が付きそうな勢いでエリーを指差すレイア。行儀悪いよ？

「「え？」」

「どうしたの？」

「いや・・・エリー相手は、ちょっと・・・緊張する」

「ふふん。それなら尚更やって貰わないとね」

戸惑うエリーとあたしを余所にレイアは、ミラ達にも見ておきなよと言って、自身もエリーの後ろに立った。

「えっと・・・いつも通り、エリーでいい？」

「え？うん」

「分かった。じゃ・・・」

はあ・・・緊張する。

「エ、エリーお姉ちゃん／＼」

『っ！』

うわあ！恥ずかしい！

たまらず両手で顔を覆うと、熱くなっているのがはっきり分かった。
うう・・・もう！レイアのバカ！

「きゃー！」

いきなり誰かに抱きしめられて、目を開けると、エリーだった。

「プリムラ！可愛い！」

「エ、エリー！／＼」

「あ・・・確かに今のはね／＼」

「うむ／＼強烈だったな／＼」

「ヴォルトなんて固まってるぞ」

「プリムラー！」

「ちょ！エリー！」

結局、この騒ぎはアルヴィンとローエンが帰ってくるまで続いた。

これからは呼ばないようにはしないと。。。。

空のお散歩・1

「うわあー！たかーい！ジュデイス、バウルってすごいね！」

「ふふ、喜んでくれて嬉しいわ。バウルも貴女が気に入ったみたいよ？」

「え？ホント？バウル？」

ブオオオ・・・

「えへへ、ありがとう」

ただ今バウルに乗って空のお散歩中。あたしとジュデイス以外のみんなは、バウルが運んでいるバンエルティア号という船の方に乗っている。プルートの昨日戻ってきたけど、リフォームに疲れたようで、帰って来るなりベッドに突っ伏した。なにも一人でやらなくても良かったと思うけど・・・。

「あなた、バウルの言葉が分かるの？」

「うん。ほんの少しなら。バウルって魔物とは違うよね？」

纏っている雰囲気は魔物とは違う。

あ、そういえばイルとライは元気かな？

お父さん見つかったのかな？

どんな人なんだろう？

「ええ、バウルは始祖の隸長エンテレケイアという種族なの」

「へえ〜。よく分からないけど、凄いんだね？」

「ふふ、そうね。そろそろ船に降りましようか？」

「はい」

下に降りると、リタがラピードに引つ張られていた。

仲いいね。

「プリムラ、お帰り」

「うん、ただいま、エリー。あれ、なにしてるの？」

ラピードとリタを指差しながら聞くと、降りてきたジュディスが答えた。

曰く、ラピードは水が苦手で、リタはそれをからかったことがあり、その仕返しというかそんな感じで、今ラピードがリタをからかっている所らしい。

「ちよっ！離しなさいよ！ラピード！もうそれは終わったでしょ！」

前にもあったのかな？

「エステルがお昼ご飯を食べようって」

「あ、もうそんな時間？」

「うん」

「じゃ、行きましようか」

みんなの所に行くと、アルヴィンとレイブンは既にお酒を飲んで
た。

「いやー！中々わかるじゃねえの！おっさん！」

「おっさんは余計だって！」

酔うの早すぎでしょ。

「ローエン、帰ったらよく眠れる紅茶いれてあげてくれる？」

「ええ」

ブルートの方がこっちの物は分かってるだろうけど、あの状態じゃ
どうにも出来ないからね。

空のお散歩・2

「エリーゼって、なんだかデュークに似てませんか？」

「ああ、どっかで見たことあると思ったら、そういうことが」

「？」

エステルとユーリの言葉にエリーは首を傾げていた。

あたしたちは引き続き空の散歩をしていて、昼食を食べているんだけど、ミラとアルヴィンとレイブンの3人はすっかりできあがっていた。また二日酔いになるんじゃないの？まあ、苦労するのは多分お母さん役のジュードだと思っけど。

「ミラさん、その辺にしておきませんか……。酔い過ぎると危ないですよ？」

「何を言っている！私は酔ってなどツク！いないぞ！ヒック」

「はいはい。ミラ、お酒はそこまで。ユーリ、船室借りるよっ。」

「ああ。お前も大変だな？」

「もう慣れたよ」

そういってミラに近づくとジュード。

「おお、ジュード、君は何故3人もいるのだ？」

「はあ……」

相当酔ってるね……シャドウはまだ大丈夫みただけど、ルナはシャール家で呑んだ時すっかり酔ってたし。

「シャドウ……もっと遊んでくださいよ。淋しいじゃないですか」

現に今もすっかり酔ってる。

「昨日遊んだだろ？」

シャドウにしな垂れかかって甘えるような声色で言うルナに、シャドウがそう返すと、ルナは下を向いて黙り込んだ。

「……」

「ルナ？」

「……う……ぐす……シャドウ……わたしのこと、嫌いなんですか？」

「は？お前、なんで泣いてるんだ？」

まさかの泣き上戸。

「あ、シャドウがルナを泣かした」

「シャドウ、あなたがそんな男だったなんて」

レイアとセルシウスはここぞとばかりにからかい始めた。

「黙ってる、お前ら！おい、ルナ？泣きやんでくれよ、な？」

「じゃあ、遊んでくれますか？」

「あ、ああ。いいぞ？」

涙目+上目遣いで迫られたら、大抵の人は落ちるよね？あたしは背が低いから、殆どされることはないけど。エリーにやられたらキュン死しちゃうかも。

「あ、それで、デュークって？」

「ん？まあ、なにかと力を貸してくれた奴だよ」

「ふ〜ん」

どんな人なんだろう？

「プリムラ！ちとこつちに来るのじゃ！」

「え？うわ、ちょっ！パティー!？」

突然走ってきたパティに手を引っ張られて、船首に連れて行かれた。何事かと、エリー達も後を追ってくる。

「あれを見るのじゃ」

「あれ？」

パーティが指差す先には空が広がっているだけで、何も見あたらない。何があるの？と聞きかけて、空の向こうから何かが来るのが見えた。どンドンこちらに近づいて来て、その姿がハッキリとしてくる。

「！あれって！エリー達は待ってて！ルナを連れてくるから！」

急いでみんなの所に戻って、まだシャドウにくっついてるルナの首根っこをつかんで船首に引っ張っていくと、さっきよりもハッキリと確認できる距離まで来ていた。

白い鱗に、大きな翼と大きな角を持ち、額に傷痕を持った龍。

「ルナ！見て！」

「なんですか……？」

「いいから！」

「なに？どうしたの、プリムラ？何か……あ！」
レイアも気付いたみたいだ。

「ルナ！しっかり見て！」

「ん……え？え、ええ！なんで!？」

「グオオオオオオオ！」

その龍は船首にあたしたちの眼前まで来ると、大きく咆哮した。

「ホワイト」

再会

「おそらく、お前と戦った時に受けた攻撃が脳に響いたのだろう。そのお陰で、お前と、お前に関連することを覚えていたのかもしれない」

空中散歩から帰ってきたあたし達は、ユーリたちと別れを告げて、急いで宿に戻り、プルートをあたき起こした。ホワイトが待っている外まで行って、憶えていることを確認してかの結論が、今の言葉。

「なににせよ、こいつは我等のことを憶えている。良かったな？ プリムラ、ルナ」

「うん！ ホワイト！ これからもよろしくね！」

「憶えていてくれて嬉しいです！」

あたしとルナはホワイトに抱きついた。続いてエリーとレイアも抱きついてきた。

「しっかし、こんなことが起こるんだな？」

「プリムラさんの思いが届いたのでしょう。良いことではないですが」

「まあな」

その日、あたしとルナはホワイトと一緒に外で眠った。

久しぶりに感じたホワイトの鱗の感触は、前と全然変わっていないなくて、ひんやりしていて気持ちよかった。

翌日、目を覚ますと、ホワイトの翼が上に被さっていて、本当に憶えてくれていたんだってことを改めて実感した。

それから、明日はどこかにピクニックでも行こうという話になった。お昼は行った先でバーベキューをする様だ。ホワイトの分足りるかな？

街道の人目に付かないところでホワイトと一緒に寝転んでいると、ヴォルトが歩いてきた。

隣に同じように寝転んで、暫くそのまま3人で空を眺めていた。

「プリムラって、凄いいよね？」

「え？いきなりどうしたの？」

静かな時間が長かったから危うく寝そうになった時に、ヴォルトが口を開いて言った言葉は、あまりにもいきなりだった。

「だって、セルシウスやボクを復活させてくれたり、ドラゴンソードとも仲良くなったり、他にも色々あるけど、ホワイト・ドラゴンの習性まで変えちゃったじゃん？それって、きっと他の誰にも出来なかったよ？」

「そうなのかな？」

その質問にヴォルトは迷うことなくそうだよ、と返した。

あたしはそうは思わないけどな……。

それもあつたら嬉しいけど、ホワイトもあたしたちのことを忘れたくないと思ってくれたからじゃないかな？

『ぐぐぐぐぐ』

顎の近くを撫でると、ホワイトは気持ちよさそうに鳴いた。

迷子・1

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「迷った？」

今日、あたし達は生ける森にピクニックに来てただけど、レイアと色々話している内にみんなとはぐれてしまい、それに気付かず進んでしまったので、結果迷ってしまった。ていうか、ホワイトが近くにいたのに見えなくなっただことにも気付かないってどうなんだろう？

「とりあえず進もうか？まっすぐ行けばどこかに着くでしょ」

「それもそうだね」

レイアの提案に乗って、あたし達はとりあえず進むことにした。

途中何度か魔物と会ったけど、あちらから仕掛けてくることはなかったからあたし達も無視して進んだ。

30分くらい進んだ所で少し開けた場所に出たから、そこで休憩することにした。

「みんな、わたしたちがいなくなったこと気付いたかな？」

「さすがに気付いてるとは思っけど……。多分みんなも適当に進んでるんじゃない？まっすぐ進んでればどこかに着くんだしさ」

「それもそうだね。これ以上動くは止めてじっとしてよっか？」

「だね」

座っていた体勢から後ろに倒れ込んで大の字に寝転ぶ。

「空が少ししか見えないね」

「うん。暇だね……。しりとりでもする？」

レイアがそう言ったので、あたし達はしりとりをすることにした。

「じゃあ、あたしから。りんご」

「りんご」

「りんご」

「うみ」

「みら」

「らんく」

「くりあ」

「ある……あるふねど」

今アルヴィンて言おうとした。

「ど……どわーふ」

「ふ……ふ」「フレイ」

「い……」「イリア」

「あんたい」

「い……ん？ねえ、今ここにいるのってあたしとレイアだけだよ
ね？」

「え？うん」

「じゃあ、さっきの声って？」

「あ、それあたし」

「え？」

聞こえた声に振り向くとそこには綺麗な銀髪を持ち、可愛い顔立ちの女の子がいた。

「だれ？」

迷子・2

「こっちで寝てるのがフレイとラザリス」

「レミリアの彼氏？」

「うっん。お兄ちゃんだよ？名前で呼んでるけどね？」

レイアのいきなりの質問にも動じずにレミリアは答えた。

さつき、あたし達が寝転んでいた所の結構近くにいたそうで、何か声が聞こえて行って行ってみたらあたし達がいて、レイアが『ふ』で詰まっていたからフレイの名前を言ったらしい。その次に言った『イリア』と言うのは、レミリアが所属しているギルドにいる女の子らしい。

「じゃあ、ラザリスはレミリアの妹なの？」

「ん？娘」

「へえ」

「いやいや！プリムラ！そこは簡単に流しちゃダメでしょ！」

「まあ、冗談だけど。娘みたいな子ってことだよ。あたしがママでフレイがパパって具合に」

「なんだ・・・びっくりした」

それからレミリアのギルドの話しなんかを聞いたりして、あたし達も今までの旅の話しをしたりした。その途中で、レイアがレミリアに好きな人はいるのかってという質問をして、レミリアは

「フレイ」

と何の躊躇いもなく答えた。

「それはお兄ちゃんに対しての好きでしょ？」

「違うよ？あたしは本当にフレイが好きな。兄妹とかそんなのは関係なしに」

レイアがそういう意味で聞いたんじゃないと言った感じで言った言葉に、レミリアはまた何の躊躇いもなく答えた。

その表情からも、その言葉が冗談ではないということが分かった。

「でも・・・兄妹だよ？結婚とかも出来ないし」

「それを承知の上で、好きになっただんでしょ？」

「うん。船のみんなもとっくに知ってるけど、反対したりとかはしてないんだ」

レミリアのギルド『アドリビトム』は船を拠点としているらしく、名前がバンエルティア号とさっき言っていた。現在のギルド員はざっと数えて70人はいるらしい。

賑やかだろっな〜・・・そんなにいたら。

「ならいいじゃん」

「プリムラ・・・」

「あたしだって似たようなもんだよ。女の子しか恋愛対象に見れないし」

「え！そうだったの!？」

「「し・・・」」

「あ」

大声を出したレイアにあたしとレミリアが同時に人差し指を口に当てて静かにするように合図する。フレイさんもラザリスも気持ちよさそうに寝ているんだし、自然に起きるまでそっとしておきたい。

「確かに今までハッキリ言ったことはなかったけどね？とにかく、あたしもレミリアに少し似てるってこと」

「だね。普通とは違う恋仲間だ」

「まあ、そういうことだね」

「じゃあ、プリムラは誰が好きなの？友達とかの好きじゃなくて、恋愛感情として」

レイアの質問にあたしはエリーと答えた。

「こっちに来て一番最初に好きになったのはエリーだった。アグ姉

とプレ姉、レイアもミラもセルシウスもルナも好きだけど、恋愛感情を抱いてるのはエリーだけかも」

「そっか・・・」

あたしが答えるとレイアは少し落ち込んだように、膝を抱えてしまった。

「でも、もちろんレイア達のこと好きなんだよ？」

「わたしだってそうだよ。でも・・・」

「でも？」

「・・・・・・」

言葉を切ったレイアに聞き返してもレイアは答えなかった。

「レイアがプリムラに対して抱いているのは、恋愛感情なんだよ」

え？

迷子・3

「レミリアの言う通り、わたしはプリムラが好き。友達としてもそうだけど、一人の女の子としても好きなの」

「・・・さっきも言ったけど、あたしもレイアのこと好き。でも、そこに恋愛感情はないの・・・」

「うん・・・それは分かってる」

レイアは頷いて、俯かせていた顔を急に上げてあたしを見た。

「だから、これからアタックしていく。プリムラがわたしを好きになってくれるように。エリーゼとプリムラが両思いだってことは知ってるけど、だからって諦めることは出来ないから」

覚悟してなさい？とウインクをするレイアに、あたしは不覚にもときめいてしまった。

「あれ？プリムラ、顔赤いよ？」

「っ！そ、そんなことないよ！／＼／＼」

顔をそらすとそこにレミリアがいて、見るなりからかわれた。言われた通り、自分で自分の顔が赤くなっていることがハッキリ分かる。

これから大丈夫かな？

「あ、そろそろフレイが起きる」

「え？どうして分かるの？」

「レーダーが反応してるから。ほら」

そう言ってレミリアは自分のアホ毛を指差した。そのアホ毛はフレイの方をまっすぐに指している。どういう仕組みなんだろう？

なんて考えていると

「……ん……ん？」

本当にフレイさんが目を覚ました。

起き上がって、隣に寝ているラザリスの頭を撫で、レミリアを見た後に後ろにいるあたしとレイアを見た。

迷子・4

「成る程な・・・とりあえずお前達がバカだということは分かった。迷ったら普通その場を動かさずじっとしているだろう?」

返す言葉もございません。

「まあ、ここにいればそのうちお前達の仲間も来るだろう。俺たちもラザリスが目覚ますまではここにいる」

「ご迷惑をお掛けします」

「まあまあ、フレイ。いいじゃない? お陰で友達になれたんだからさ」

レミリアはフレイに後ろから抱きついてそう言った。フレイも慣れているのか、それに対しては何も言わずに、それもそうだな、と答えた。

あ、2人は兄妹なんだからこれくらいは当たり前なのかな? 地球、ていうか日本じゃ、仲の良い兄妹なんて、殆どいない気がするけど・・・この2人が本来の兄妹の在り方なのかな?

2人を見ているとそう思わせられる。

「そういえば、フレイとレミリアって何歳なの?」

レイアの質問を聞いてそういえば、知らなかったなと思って、あた

しも2人を見た。

「俺が十九歳で、こいつが十七歳。んでラザリスは、まだ一歳ちょっとってところか？」

「え〜つと・・・うん、確かにそれくらいだね」

「え？あんなに大きいのに？」

ラザリスは、確かに身長は小さいけど、あたしよりはあるから、どう考えても十三歳位だとは思っただけど・・・。

「まあ、ちょっととした事情があつてな？」

「そつか。ねえ、アドリビトムにはどんな人がいるの？」

七十人もいたら、いろんな人がいて当たり前だし、そんな人たちに囲まれてどんな生活をしているのか気になる。

ユーリ達の所つて、ユーリとエステルとリタとカロールで街とか歩いてたら、何人かの人の目には家族に写ると思うけど、アドリビトムにもそんな感じの人たちっているのかな？

「ボスが白い悪魔。体重をいつも気にしている奴。いつも俺の背後に張り付いている奴。切れると所構わず銃をぶっ放すこいつ。まあ、簡単に言えばまともな奴は殆どいないってことだな」

「なにそれ？」

「いや、実際来てみれば分かるぞ？つと」

言いながらフレイは顔を右にそらすとそこを何かが通り過ぎた。見てみるとその延長線上には二本の短剣が刺さっている。

「流石我等がボスだな。こんな所まで投げってくるか。もう一本はあいつかな」

「だね。地獄耳っていうか勘が鋭いって言うか。帰ったら何かされるかもよ？」

「・・・まずいな。俺あの二人が揃ったら何も出来る気がしないんだが？」

「それは多分船のみんなも一緒だよ」

どこからかなんて見当も付かないけど、こんな森の中の的確に投げてくるなんて・・・どんな人たちなんだろう？

「なんか、凄いね？」

「っ！そ、そうだね／＼／＼」

いきなりレイアが耳元で囁いて来たからびっくりした。

迷子・5

「うゝ・・・ぱぱゝ・・・ままゝ・・・」

「ん？ラザリス、俺たちはここにいるぞ？」

「どこにも行かないからね」

「ん・・・すうゝ・・・すうゝ・・・」

寝ていたラザリスが近くに二人がいないことに、寝ていながらも気付いたのか寝言を言うのと、二人はそう優しく言ってラザリスの手を握った。するとラザリスは、小さく笑ってまた寝息を立て始めた。

その様子を見てみると、ラザリスは本当に二人の子なんじゃないかって思ってくる。

「やはり、まだまだ子どもだな、こいつは」

「そうだね。でも、それでいいんじゃないかな？急いで大人になるうとしたら、楽しいことを見逃しちゃうし」

「だな。こいつにはもっと世界を見せたやりたいし」

二人はラザリスをととても優しい目で見つめて、その光景を見ているあたし達も温かくなることが出来た。なんだが、心から温まっていく感覚が全身を包んで、いつまでも見ていたいとさえ思う。

『プリムラー！レイアー！』

その時、あたし達が歩いて来た方向からジュードの声が聞こえた。

「あ、ジュードの声。行くつか、プリムラー？」

「あ、うん。それじゃ、レミア、フレイ、一緒にいてくれてありがとう。また会えたら会おうね？」

「ああ」

「うん」

手を振って言うと二人も手を振って返してくれた。

声が聞こえた方に走っていくと、そこにはジュードとエリーとミラがいた。分担して探してくれていたみたいだ。

「ジュード！エリー！ミラ！」

「プリムラー！レイアー！良かった！」

駆け寄るとエリーに

「もう。心配掛けないでよ」

と頬を膨らませて言われた。

「ごめんね？」

「なにも起きなかったか？」

ミラに聞かれて一瞬、レイアの告白が過ぎただけど、それは言わずにフレイとレミリア、それと話してはいないけどラザリスのことを三人に話した。

「アドリビトム？」

「知ってるの？エリー」

「うん。この前ユーリたちと会った時に近くの人が話してた」

「ふむ。なんと言っていたのだ？」

あたし達も気になりエリーの言葉に耳を傾けた。

「アドリビトムには白い悪魔がいるって」

「」「白い悪魔？」

ジュードとミラがなんのこと？と言った感じでお互いの顔を見合う。

「ねえ、それってフレイが言ってた人のことだよね？」

「うん。きっとそうだと思う。どんな人なんだろうね？」

レイアが屈んで言ってきたらから、あたしは頷いた。

改めてアドリビトムの人達がどんな人なのか気になってきた。

アドリブとムとの出会い・1

「まったく、心配を掛けるな」

「ごめんなさい」

なんか謝ってばかりだな。まあ、全面的にあたしとレイアが悪いから仕方ないけど。

エリー達と合流した後、プルートの所に戻って、まだ探していたセルシウス達に戻ってくるのを待っていた。暫くして、ヴォルトが戻ってきて、後ろからセルシウス達も戻ってきた。

「プリムラー！レイアー！探しましたよー！」

ルナが涙目で抱きついてきたから、あたしも抱きしめて頭を撫でた。

「お？」

すると後ろから、今度はエリーが抱きついてきた。

「わたしだって心配してたんだからね？」

「うん。本当にごめんね？」

「わたしも！」

「うわー！」

次いでレイアも抱きついてきた。

ずっと一緒だったのに・・・アタックすると言うのは本気みたいだ。

「全員揃ったな？それでは出発するぞ。目的地はもうすぐだ」

プルトの言葉にあたしたちは頷いて、改めて出発した。

それから約1時間後。

あたし達は見晴らしの良い高台に到着した。

「こりゃ、すげえな」

「ええ」

アルヴィンとローエンが感嘆の声を漏らした。でも、それも分かる。あたしもこの光景には感動を覚えたし、みんなも声は出さないけど、感動していることは分かる。

少しの間、誰も何も言えないまま、静かな時間が流れたけど

「ひゃっ！」

ドテッ！

という声と音にその静寂は破られた。

みんな揃って音のした方を見ると、

「あいたた〜」

「おいおい、大丈夫か？」

金髪で幼い顔立ちをした少女と、赤髪で腰に二本の剣を刺した男子がいた。

アドリビトムとの出会い・2

「……………」

「二人とも、黙ってないで何か言ったらどう？」

ホールに正座して、だらだらと額から汗を流すアルヴィンとロイド。あたし達はその二人は放っておいてコレット・マルタ・カノン・Gとおしゃべりをしていた。

この起こりは2時間ほど前に遡り、あたしたちが見晴らしの良い場所でコレットとロイドに会った所から。

以下回想です。

多分次話まで持ち越すかも……。ん？まあ、いいか。

『おいおい、大丈夫か？』

『うん。大丈夫だよ』

音からして結構思いつきり転けた気がしたけど、鈍いのか丈夫なのか、とにかく女の子はなんともないみたいだった。赤髪の少年が手を差し出して少女を起き上がらせて、多分確認をした後にあたし達の方を見た。

『お前らこんなところでなにしてるんだ？』

『ふむ、若いが・・・中々やるようだな』

ミラがあたり達に聞こえるかどうかくらいの声で呟いた。

ミラの言う通り、少年も少女も年は多分ジュードかレイア位かな？でも、闘い慣れしているのか、さりげなく手を剣に掛けていていつでも抜けるようにしている。少女の方は・・・なんとというか、こつ、ぼわぼわしていて凄いかどうか分からない。

『ミラ、あの娘はどう思う？』

『ふむ・・・なんだろうな？よく分からない』

『我（俺）も』

聞こえろと思っていたのが伝わったのか先に答えられた。

『僕達はピクニックに来ただけど・・・君たちは？』

『ああ、俺たちはアドリビトムの一員だ。仲間の帰りが遅いから探しに来ただけどな・・・』

仲間・・・？

『それって、フレイとレミアとラザリス？』

『3人に会ったの！？』

『うん。ラザリスが起きるまで、森にいるって言ってたよ？』

『ああ、成る程』

少女の問いに答えると、少年は納得したように頷いた。

『それで、お二方は？』

『ああ、悪い。オレはロイド・アーヴィングだ。フレイ達と同じくアドリビトムのメンバー』

『わたしは、コレット・ブルーネル。同じくアドリビトムのメンバーだよ』

ローエンの問いに二人は答えて、その後あたし達も自己紹介をした。その後、二人はずっと後ろにいたホワイトを見て、おどおどしながら尋ねてきたから、なんの心配もないと言って、紹介し、あたしたちもそれぞれ名乗った。

『・・・なあ、お前ら船に来てみないか？』

『え？』

『あ、いいねそれ！きつとみんなとも仲良くなれるよ！』

『だろ？』

なんだか勝手に話しが進んでいき、あたし達はアドリビトムに赴くことになった。

アドリビトムとの出会い・3

『む？お前は？』

『ん？』

船の甲板に着くとそこには蒼い髪の女性がいた。どことなくセルシウスに似ているような……。二人もお互いにそう思っているのかな？

『プリムラ達は先に行っていてくれ』

『うん。分かった。ホワイトはそこで待っててね？』

『グア』

セルシウスとホワイトを甲板に残してあたし達はロイドとコレットの案内の元ホールに入った。

『あら、お帰りなさい。その方達は？』

ホールに入ると、さっきの人と同じような蒼い髪を持って、ポニーテールにしている女性が出迎えてくれた。

ロイドは簡単に事情を説明して、その後あたし達は自己紹介をした。

『成る程ね。私はアンジユ・セレーナ。ここ、アドリビトムのリーダーをしているわ』

『若いのに立派な者だな』

『あら、お褒めいただき光荣だわ』

ミラの言葉にアンジュさんはやんわりと答えた。

それからアンジュさんの誘いで、ケーキでも食べようと言ったことになった時に

『太っちまうぞ?』

ピキ

あれ?何か聞こえた?

アンジュさんを見ると、なにかあったのか動きが止まっていて、その後ろにいたコレットはがくがく震えていた。その尋常じゃない震え方にジュードが心配して駆け寄った。

『オレ達も言ってるんだけどな?聞かないんだよ』

あたし達の後ろではロイドがアルヴィンにそう言っていた。

『ねえ、コレット大丈夫?』

『震え方が凄いですよ?』

『ジュードさん』

『心配ないよ？単に怖くて震えてるだけだから』

『怖い？何が怖いと言っただけ？』

『なにか起きるの？』

『ルナ、一応離れるなよ？』

『はい』

『ああ、成る程な』

上からレイア・エリー・ローエン・ジュード・ミラ・ヴォルト・シヤドウ・ルナ・プルート。

プルートは何か納得しているみたいだ。

『ロイド、アルヴィンくん』

『ん？』

『ちよっと、お話ししましょうか？』

『っー』

ロイドとアルヴィンだけでなく、あたし達も怖くて何も言えなくなつた。

『はいっー』

二人は怖すぎたのか、何故か即座に正座をして並んだ。アンジユが黒い笑みをたたえながら二人に近づく度に、二人はびくつと肩を震わせている。

余波であれだけ怖いんだから、直に向けられた時の怖さは計り知れない。

まあ、その後、キッチン（があるらしい）所の扉が開いてピンクの髪の毛の子と亜麻色の髪の毛の子が出てきた。

後ろでは二人がアンジユに見下ろされてがくがく震えている。

とりあえず回想は終わりかな。

アドリフトムとの出会い・4

「まあ、あの二人は完全に自業自得だから放っておきましょう。それよりケーキ食べましょうよ。ロックスの作るケーキは美味しいわよ?」

「うん。他にも何人がメンバーがいるから、是非会って行って?」

「あ、あたしはちょっと甲板に行ってから行くから、先に行つて?」

みんなに断つてから、あたしは甲板に向かった。

それで、甲板に出た途端

「さむっ!」

とんでもない冷気が襲ってきた。カン・バルクも寒かったけど、これはそれ以上だよ。

「あ、プリムラ」

声が聞こえて上を見てみると、氷を足場にして上空に立っていた。向かいにはさっきの女性もいて、同じように氷を足場になっている。てことは、彼女も氷を操る力を持つてることなんだよね? こっちのセルシウスとか、そんなところかな?

四大精霊もいたし……。

『グア』

「あ、ホワイト。ありがとう」

ホワイトがゆつくりと手を差し出してきたから、その上に乗ると、翼を折りたたんで周りの冷気から守ってくれた。

船は少し傾いたけど・・・。

「プリムラ」

「あ、セルシウス。なにかあったの？」

「いや、単にどちらの力が強いかを比べていたんだが、いつの間にか熱くなってしまった」

「じゃあ、やっぱり、あの人はセルシウスなんだね？」

「ええ」

「貴女がプリムラね？」

セルシウスと話していると、上からこちらのセルシウスが降りてきて、そう聞いてきた。あたしは頷いて答えて、お互いに自己紹介した。

「セルシウスはこの場所が好きみたい」

「ああ、涼しいからね」

「ええ」

この場所は常に風が当たるから、氷属性のセルシウスにとっては、船では一番良い場所なのかも知れない。

「みんなはケーキ食べに行つたよ？二人はどうする？」

「私は行くわ。結構動いたから、お腹が減つたし」

「そつか。あたしはもう少しホワイトと一緒にいるね？みんなに伝えておいて？」

分かつたわ、と言ってセルシウスは中に入つていったけど、すぐに戻ってきた。場所が分からないみたいで、教えたらまたすぐに中に戻って、甲板にはあたしとホワイトとこちらのセルシウスが残された。

あ、後氷も。

アドリフトムとの出会い・5

「貴女は不思議ね？」

「………ん？」

ホワイトの翼に包まれながら、眠り掛けていたあたしは、なんとかセルシウスの言葉に反応した。

「ホワイト・ドラゴンは、魔物の中でもトップクラスの力を持っているのにも関わらず、そこまで仲良くなれるんだもの」

「ああ、あたしのお父さんが魔物と話せる力を持った一族で、小さい頃からそれを見ている内に、あたしも理解できるようになったんだ……はあ、ホワイトあつたかい」

もう、ホントこのまま眠りたいなあ……。

「ふふ」

そんなあたしを見て、セルシウスは頬笑んで、頭を撫でてくれた。ひんやりしていて、こちらも気持ちいい。

むこうにいた頃、手の冷たい人は心が温かいつて聞いたことがあるけど、セルシウスの場合それは本当だろうか……。

後でみんなの手も触ってみようかな。

「仲間には伝えておくわ。だから、そのまま眠りなさい?」

「う……ん。おやすみ……」

『グア』

「あり……がとう」

眠る寸前に、ホワイトがそばにいるよ、と言ってくれて、あたしは心が温かくなるのを感じながら夢の中へと旅立った。

ん?なんか、声が聞こえる。

「か……い……」

ふにふにと、頬にも何かでつつかれている様な感触が……。

「ん??」

次第に意識が覚醒してきて、目を開くと、正面にぼんやりと何かが揺れているのが見えた。銀色で、細くて、まっすぐ立ったり、回転したり、左右に揺れたりしている。

何だろう?と思っ、それに手を伸ばし、触ってみるとそれが髪だということは何となく分かった。

「あ、起きた?寝顔可愛かったよ」

「パパ、この人だね？」

そこにはレミリアと、フレイの服をくいくいと引っ張っているラザリスがいた。

どうやら戻ってきたみたいだ。

アドリフトムとの出会い・6

「うわあ！かっこいいー！」

『グオオオオ！』

「きゃーー！」

ラザリスに褒められた機嫌が良くなったのか、ホワイトは大きく吠え、それを聞いてラザリスはまた興奮した。近くにはフレイがいなにか起こっても良いようにしている。

「いやあ、帰ってきたら早速良い物が見れたよ。プリムラ、可愛いね〜」

ぴこぴことレミリアのアホ毛がゆらゆらと動いていて、自然と目で追ってしまふ。ホントどうやって動いてるんだろっ？

「ん？ふふ〜ん」

アホ毛がレミリアの眉間くらいの高さに降りてきて、手を伸ばすと届きそうなので、手を伸ばしてみてもう少しで触れられそうって所まで行ったところで、ひょい、と左に避けられた。

「あ

慌てて左に手を伸ばすと今度は上に避けられた。

「あ。えいー！」

跳ねたら今度は後ろにくるんとなって、また避けられた。

もう、ホントどうやって動いてるの？これ。

その後も捕まえようと頑張ったけど、健闘空しく捕らえることは出来ませんでした。

「うう〜」

「もう、プリムラったら、ホント可愛いんだから〜」

そう言ってレミリアは抱きついてきた。

すりすり頬を擦り寄せてくる。

すべすべしていて気持ちいい。

「ふふ」

「プリムラ、あつたかい〜」

「レミリアもあつたかい〜」

あたしとレミリアはエリーがホールから出てくるまで抱き合っていた。

気持ち再び・1

「エリー、機嫌直してよ」

「嫌です！もう、プリムラなんてしりません！」

「エリ」・・・

エリーは誰が見ても怒っているということが分かる程、不機嫌オーラを出していた。よく知りもしない船の中をずんずんと進んでいく原因はやっぱり、さっきレミアと抱き合っていたことなんだろうけど・・・いつもレイアやルナが抱きついてきても不機嫌になっただりしなかったのに・・・。

なんて考えている内に、エリーは梯子のすぐ近くまで行っていた。慌てて走り、手をつかんで何とか引き止める。

「離してください」

「っ」

さっきもそうだったけど、エリーに敬語を使われると、なんか辛い。

一気に距離を開けられたみたいで・・・。

「プリムラは、本当にわたしが好きなんですか？」

「当たり前だよ。その気持ちに嘘なんてない」

今更そこを疑われるのは、敬語を使われるよりも辛い。

あたしがエリーに対して抱いていた気持ちと、エリーがあたしに対して抱いていた気持ちが同じだったと知った時、あたしがどれだけ嬉しかったか。

「それなら、それを証明出来ますか？」

「証明？」

「わたしが好きだってことを、証明できますか？」

「うん」

あたしは迷わず頷いた。

「なら、キスしてください」

「え？」

そんなことでいいの？と内心思ったけど、エリーが相手だと思つと一気に恥ずかしくなった。

「あ、その・・・えっと・・・え？／／／キスって、キス？／／／」

「そうです。ちゃんと唇にしてください」

「うえ？／／／」

恥ずかしさのあまり変な声が出てしまった。

「……やっぱり……出来ないじゃないですか……」

明らかに落胆した様子で、エリーは下を向いて、あたしの手から自分の手を離した。

そのまま何も言わず、引き返してこの場を去ろうとするエリーを見て、ここで止められなかったら、もうわかり合えない気がした。

大袈裟かも知れないけど、本当にそんな気がした。

「エリー！」

「っ！」

駆け寄って背中に抱きつく。

「ねえ、エリー、こっち向いて？」

「……」

暫く、エリーは何も言わなかったけど、やがてゆっくりと体を反転させた。

エリーの顔が見えると同時に、あたしは

「んっ」

「っ！」

エリーの唇に自分の唇を押し当てた。

気持ち再び・2

「ん・・・ちゅ・・・」

「ふぁ・・・ん・・・ちゅぷ」

ここがホールだと言うことも忘れて、あたしはエリーの唇に押し当てた自分の唇から、下を侵入させてエリーの舌と絡めた。

小さな水音が、すこしだけ聞こえる。

「ん！っは・・・エリー・・・んっ！」

いきなりエリーの方が激しくなって、驚いて一度唇を離すと今度はエリーがあたしの両頬を押さえて逃げられないようにして、唇を押し当ててきて、無理矢理舌を入れてきた。

「ん・・・はぁ・・・ちゅぷ、んん」

「ちゅる、ぴちゃ・・・はぁ、プリムラ・・・可愛い」

唇は離されたけど、あたしはいきなりのエリーの攻めのお陰で頭が混乱していた。

その状態で

「もっと、プリムラの可愛い所、みせて？」

「え？ん！」

また唇を押し当てられた。

「んあ……は、んん……ちゅぷ」

「ふ、ん……ぴちゃ、ちゅ……プリムラ……ん」

さつきよりも長く、口内を犯され次第に意識がぼんやりしてきた。

やがてエリーは、唇を離すと、首筋を舐めてきた。

「ふあっ！」

まさかそう来るとは思っていなかったから、その分驚きが大きかったけど、エリーに舐められているということが分かれると途端に快感に変わった。

「ふふ、プリムラ、ホントに可愛い」

そう言っただけは耳に甘噛みしてきた。

「ふあっ！んっ！」

「静かにしないと気付かれちゃうよ？」

人差し指を口の中に入れられた後に耳元で囁かれて、もう訳も分からないまま、あたしはエリーの指を赤ん坊みたいにむしゃぶっていた。

そういえば、エリーって偶に黒くなることがあるって、レイアが言
ってたっけ？

でも、こんなエリーも良いなあ・・・。

ケーキ

「はあ・・・はあ／＼／」

「ふふ、プリムラ、普段はあんなに元気なのに、キスだけでこんなになっちゃうなんて。後3年くらい経った時はどうなるんだろうね？」

「もう・・・。ねえ、これで機嫌直してくれる？」

「うん」

良かった。

「でも、今度はもっと攻めるからね？」

エリーはそう言って、あたしの唇に人差し指をちよんと当てた。

内心それもいいかもと思いつつ、うなずき、あたしはエリーに引っ張られてみんなの所に向かった。

「あ、お帰りエリーゼ。ちょっと遅かったね？」

「はい、少し船の中を見ていました」

「あら、迷わなかった？」

アンジュさんが声を掛けてきて、エリーはそれに、少し歩いただけです。だから大丈夫でした。と答えて、あたしを椅子に引っ張っていった。

元々あたしの為の席なのか、そこは空けられていて、左にはルナが座っていた。

あれかな？子ども括りってことかな？

ルナは見た目は子どもだけど、実年齢はローエンよりも上だからね？精霊に年齢なんて関係ないけど。

「貴女がプリムラさんですね？」

「あ、は……い？」

名前を呼ばれて振り向くとそこには、不思議な生物がいた。何となくラピードに似ているような、その生物は浮いていて執事服を着ている。

「……どうかされましたか？」

「ロックス、まずは自己紹介しないと」

「あ、これは失礼いたしました。ボクはロックスプリングと言います。ロックスとお呼びください」

カノンノに言われてロックスさんはお辞儀をした。

「あ、どうも。プリムラです」

「こちら、ケーキです。お召し上がりください」

目の前に差し出されたのは美味しそうなイチゴの乗ったケーキだった。

「うわぁ！美味しそう！食べていいの？」

「ええ」

「いただきます」

フォークを握り、ケーキを小さく切って口に運ぼうとしたら、いきなり手が伸びてきてフォークを取られた。

「あ」

横を見るとエリーがフォークを持っている。

「エリーゼ？どうした？」

「はい、プリムラ」

「え？」

ミラの問いを無視して、エリーはケーキの刺さったフォークをあたしの方に差し出してきた。

「えっと？」

「ほら、口開けて？」

「う、ここで？／＼／」

ミラ達だけなら問題はないけど、カノンノ達もいるし、それにさっきのことがあったばかりだから余計に意識してしまう。

みんなは、ミラとルナ意外、ないか話していて、こちらを見ていない。

「エリーゼさん？」

「はやくしないと・・・わたしが食べちゃうよ？」

そう言ってエリーはフォークを自分の方へ引いた。

「あ、食べる。食べるからあ」

「なら、口開けて？」

「ん・・・あゝん／＼／」

もう、なんかエリー、キャラ変わってない？ホントはこんなに意地悪だったんだ・・・。さっきので外れたのかな？

何がかは分からないけど・・・。

「よく出来ました」

目を閉じていたからエリーがどんな表情だったかは分からなかった

けど、声からして楽しんでいることは分かった。

少しして、口の中に甘い味があふれて、口を閉じるとフォークが引き抜かれた。

「……美味しい」

このケーキは本当に美味しかった。

ローエンの作るケーキも美味しいけど、それとはまた違ったおいしさがある。

「まだ、欲しい？」

「うん！」

答えるとエリーはケーキをお皿ごと引き寄せて、また一口サイズに切った。

「はい、あ〜ん」

「あ〜ん……ぱく」

「ふふ、やっぱり可愛い」

結局ケーキは、全部エリーに食べさせて貰い、食べ終わってミラ達をみると、女性陣は顔が赤くなっていた。

ジュードはジュードで何もないうところを見ている。

ローレンティニョは「何だろ？」

何だろ？

おらば、アドリビトム

「プリムラ？」

「は、はい」

「ちよつと来て？」

「はい」

そろそろアドリビトムから帰ろうと思い、ミラがアンジユと話している、みんなもロイドやリッドとかと話している時に、手を繋いでいてエリーがそう言った。

敬語で返事したのは・・・なんか、エリーが笑ってたから。

それが普通の笑みならいいんだけど、この笑みは黒くて、敬語で返事をしてしまった。

手を引かれて連れて行かれてのは甲板だった。セルシウスはあたしたちの方のセルシウスとホールで話していて、ホワイトもどこかを空中散歩でもしてるのか、今は誰もいない。

その甲板の右端に連れて行かれて、周りに誰もいないことを確認したエリーに壁に押さえつけられた。

「エ・・・んっ」

どうしたのか聞こうとした所でいきなり口を塞がれた。

「ん……はあ／＼／エリー？」

「さっき、キスした時から、プリムラを苛めたくて仕方ないの。ねえ、プリムラはこんなわたしでも好き？」

そう聞くエリーの顔には、ついさっきまでであった余裕の色じゃなくて、明らかな困惑の色が見えた。

「もしかして、自分勝手な奴だって思われてるって、思ってる？」

その問いにエリーは少し間を開けて頷いた。

こういう所はやっぱりまだ、子どもなんだね。あたしだって子どもだけど、実年齢で言ったらエリーの倍近くは生きてる。まあ、ここにいとそんなことすぐに忘れちゃうんだけど……。

「そんなこと思わないよ？あたしはどんなエリーでも好きだから。好きなようにしていい……場所は選んで欲しいけどね？えへへ」

さっきのことで、多分我慢が効かなくなっているんだろっから、今はどうにもできないかもだけど、数日すれが落ち着くだろうし。

「プリムラ……」

頬に片手を添えられて、名前を呼ばれた後

「好き」

と言われて、あたしは知ってる、と返すとまた口を塞がれ、舌が入ってきた。あたしも自分の舌をエリーの舌と絡めると、小さいけれど、周りに誰もいないから、大きく聞こえる水音を立て始めた。

「ん、ちゅ」

「はっ、んん……んちゅ……えりい／＼／」

「ん……ぷあ……ふふ、プリムラ、必死で可愛い」

体の力が殆ど抜けた時、銀色の糸を引きながら唇が離され、エリーを見るとまた、さっきと同じ笑みを浮かべていた。

「えりい……もっと、もっとしてえ／＼／」

「ふふ、ダーメ。続きは帰ってからね？」

拘束を緩められて、立っているのもギリギリだったあたしはエリーにもたれかかった。

「はあ……はあ……／＼／」

「ホント、可愛い。プリムラ、こっちを向いて、目を閉じて？」

「ん……はい」

言われた通り目を閉じる。

「次は舌を出して？」

「ふあい」

「良い子ね」

エリーの声を聞きながらあたしは、何をされるのかドキドキしながら待っていた。

するとエリーの体が少し動いたのを感じて、次の瞬間舌の先を思いっきり吸われた。

「んっ！んん！／＼／」

初めて感じる快感に体が仰け反ってしまいそうになるのをエリーに支えられて、吸われたり、舐められたりを繰り返し行われた。

「ちゅる……は……。ビックリした？」

「ひゃい……びっく……り、ひまひた／＼／」

本当にいきなりだったから、ビックリしすぎて意識がぼうつとしてきて、自分がまともに言葉を発しているのかどうかも分からない。

「かぶ」

「ひゃあっ！／＼／」

またいきなり、今度は首に軽く噛みつかれた。

もう完全に力が抜けて、エリーの腕からすり落ちて、甲板の床に座

り込む。

「プリムラ、エリーゼ」

その時、甲板の扉が開いてジュードが出てきた。

「ジュード、どうかしたんですか？」

「うん。そろそろ帰るから、二人はこのまま此処で待っていてくれるかな？」

「はい」

それじゃ、と言ってジュードはホールに引き返した。

「ふふ、続きは帰ってからね？」

「はい／＼／」

ジュードがいなくなった途端、黒くなるエリーは、あたしの世界だったら有名女優になれたんじゃないかと思った。

その後、少ししてホワイトが戻ってきて、みんなもホールに集まった。

「ではな？楽しかったぞ？」

「「こちらこそ。ああ、あと、アルヴィンくんにはよく言っておいてね？」

「それはレイアの役目だな。頼んだぞ？レイア」

「はいはい」

挨拶しあつて、アンジュに言われたミラがレイアに頼んでその本人は元気に手を振りながら答える。

みんなもそれぞれ、フレイやレミア、クレアやカノンノと色々話している。

やがてそれも終わって、あたし達はアンジュたちに見送られながら、ホワイトに乗ってデリライカへと飛んだ。

帰る時に、一番後ろにエリーと並んで座っていると、誰にも気付かれないように耳を舐められて、声が出そうになったけど、なんとか堪えた。

それを見てエリーはまた黒い笑みを浮かべていた。

もっと苛めて欲しいなあ……。

お姉様？

「あはは！レイア・・・くすぐったいよ！」

「うりうりー！」

「あははは！だ、だめ！横腹いたい！」

今あたし達は宿のお風呂にいて、あたしはレイアに背中を流されているけど、明らかにくすぐる方を楽しんでいる。ルナはセルシウスと既にお湯に浸かっていて、ミラはタオルも巻かずに立っており、どこか遠くを眺めている。

「レイア？あんまりやり過ぎると、プリムラが倒れますよ？」

隣で体を洗いながら言ったエリーの言葉で、レイアはやっと離してくれた。

「はあ・・・はあ・・・もう！やり過ぎだよ！」

「ごめんごめん。それにしても、プリムラの肌ってすべすべだよね？やっぱり若いから？」

レイアだって若いと思うけど・・・まだ、16歳なんだし。

その後、レイアはお風呂に立っているミラに飛びついて、きゃっきやと騒いでいた。それにルナも加わり、セルシウスは被害の及ばない所でゆったりしている。

「みんな、楽しんでるね・・・」

「そうね」

そう答えながら、桶にお湯を溜めて頭から被り、泡を流すと、エリーは立ち上がった。

「ほら、早く流しなさい？」

「あ、はい」

言われてあたしも桶にお湯を溜めて頭から被り泡を流した。

アドリビトムの一件以来、エリーは近くに誰もいない時と、完全に二人きりの状態の時は、今の様に若干命令形で言うようになった。

何か言おうとした時に、例えばジュードとかが来たら、ホント一瞬で普段のエリーに戻るから、すごいと思う。

「行くわよ？」

「はい」

違うかな？今のエリーが本来なのかも。

むしろこっちのエリーの方があたしは好きだな・・・苛めてくれるし。

もう、あの時以来エリーに苛められるのが楽しみなんだよねえ。

大人になったらどうなるんだろう？

タオルを巻いてお湯に浸かると、じんわりと温かくなる。

「はあく・・・気持ちいい・・・ひゃっ！」

タオルの中にエリーの手が這入ってきて思わず声を上げてしまった。

「どうした？プリムラ」

「あ、ううん、なんでもない」

「そうか？」

「うん」

聞こえていたセルシウスに聞かれて、そう答えると、またゆったりとした。

「ふふ」

その後も、エリーに体中のいろんな所を撫でられたり、つつかれたりして、あたしはずっと声が出そうになるのを我慢していた。

「さて、私は先に上がるが、皆はどうする？」

「あ、わたしも上がります。十分温まりましたから」

「わたしはもう少ししたら、上がるよ。セルシウスは？」

「私はもう上がる。少し長く浸かりすぎた」

そう言っつて、セルシウスは立ち上がり、続いてミラとルナも立った。あたし達に先に上がると言っつて、出口に向かう三人の背中を見送つた。

それから、十分位して、レイアも上がり、お風呂にはあたしとエリーだけになった。

「やっと上がったわね。それじゃ、タオルを取って？」

みんながいなくなった途端、エリーにそう言われた、あたしはタオルを取った。

「それじゃ、声出さないように頑張りなさい？」

「はい／＼／＼」

その後、執拗に体中と口内を攻められて、結果あたしはのぼせました。

「ふふ」

頑張ったプルート

「皆、今日は我が家に来てくれ。それぞれの部屋の位置を教えてください」

「まさか、全員分用意したのか？」

「当然だ。あの家はすでに我だけの物では失くなっているのだから」

シャドウの問いにプルートはそう答え、それを聞いたあたしは、だから帰ってきたときあんなにパツタリ倒れたのか、と納得した。全員分用意したら、それは疲れるよ……。

「言ってくれば手伝ったのに」

「ヴォルトの言う通りだ。お前だけの家でないならば、私たちも手伝うべきだっただろう？」

「それはそうだが……負担をかけたくなかったのにな」

「負担なんてないよ。アルヴィンは文句言うだろうけど」

「おい」

ヴォルト・セルシウス・プルート・レイア・アルヴィンの順。

「まあ、いいではないか。プルートも私たちを気遣ってくれての行動だったのだから」

「そうだね。ありがとう、プルート」

「ええ。私もまだまだ現役とはいえ、腰などに来ますからね」

ミラ・ジュード・ローエンの順。

「朝ご飯が終わったら、すぐに行くの？あたしは大丈夫だけど」

「わたしも大丈夫ですよ？」

みんなも大丈夫だと言うので、ごはんが終わり次第向かうことにした。

街の外に集合して、プルートが歪みを開いて、ホワイトも含めて、みんなでその中に入った。

歪みを出ると、そこには家と言っているのかわからない位の大きさの建物があった。ホワイト用なのか、庭もホワイトが5体くらい入っても問題ないくらいの広さがある。

「ホワイトは、やはり広々としていた方がいいだろうかな。存分に飛び回ってくれ」

『グア！』

「ありがとう、だって。良かったね？ホワイト」

『グア！』

元気に鳴いたホワイトは翼を思いっきり広げて空に飛び立った。

旋回したり急降下したり急上昇したり、のびのびと飛んでいる。

「さて、次はお前たちの部屋だ。中に入ってくれ」

玄関を開けたプルートの後に続いて、中に入ると、

「広っ！」

レイアの言う通り、本当に広がった。

ちよつと、例えが思いつかない……。

とにかく広がった。

「一階の右端から、シャドウ、ジュード、アルヴィン、ローエン、ヴォルト、そして我だ。シャドウの部屋は一応一番陽の当たらない所にしたが、良かったか？」

「ああ、やはり明るいよりは暗い方が落ち着くからな」

「そうか。次は二階だが、右端のルナはシャドウとは反対で一番日当たりのいい場所においた」

「ありがとうございます」

「そして順に、レイア、ミラ、セルシウスだが、プリムラとエリーゼはリビングの関係上、相部屋になるが、構わないか？」

「うん。大丈夫、だよな？エリー」

「うん」

次は家具などの話になったけど、それらはもう揃っているみたいで、どこで手に入れたのか聞くと、全部頼んで造ってもらったらしい。

ちゃんとお金払ったんだね。

まあ、相手が遠慮ばかりしていて疲れたみたいだけど・・・。

キッチンやリビングを見て回り、最後にお風呂を見ると、あたし達全員が余裕で入れる広さがあつた。

確かにこれらを全部一人で準備したら疲れるよ。

本当にお疲れ様、プルート。

発覚

「アルヴィン、見たら・・・分かってますよね？」

「ちょ、エリーゼ姫？なんか怖いんだけど？」

アルヴィンの言う通り、今のエリーは全身から黒いオーラ（みたいなもの）を出しているから、それが向けられていないあたし達もちょつと怖い。

プルトの提案で最初の一回は全員で入ることになった。

タオルを巻いて、中に入り足だけお湯に浸けると丁度いい温度だった。

みんなも入ってきて、男性陣は先に体を流し、その後にあたし達が体を流した。

みんなで湯船に浸かっていると、上空からホワイトが飛んできて、静かに入浴して、お風呂全体が波打った。ルナは早速ホワイトに寄りかかって寛ぎ、レイアも脚に乗った。

ミラとセルシウスは二人で楽しそうに話していて、ジュード達も楽しそうに話している。

暫くすると、ミラ達の方からジュード達に近づいて話に加わっていた。

ルナはこくりこくりと船を漕ぎ始めていて、ホワイトが溺れることが無いように支えている。

レイアはあたしとエリーにもルナのことを頼んで、ミラ達の方に向かった。

「ルナ、寝るならベッドで寝た方がいいよ？お風呂だと危ないから」

「うっ……はい」

「ルナ、送ってくるね？」

「あ、じゃあわたしも上がる。ミラ、わたしたち先に上がって、そのままルナを部屋まで連れて行きますね！」

「ああ、分かった。私達はもう暫く浸かっている」

「はい。いこう？プリムラ」

「うん」

それにしても、このエリーがあんなに意地悪になるなんて信じられないよね……そっちの方が好きだけど。

あたしってMだったんだね……。

「ありがと、ホワイト。もう少し浸かってる？」

『グア〜』

「そっか。のぼせないように気を付けてね？」

『グア』

ルナを抱き上げて、脱衣所まで連れて行き、体を拭いてあげてから、服を着せた。

その間、エリーから放たれるオーラが半端無かったけど、それだけ何かされるのかと思うとゾクゾクした。

もう、本格的にMだね。

あたし達も体を拭いて、首にタオルを巻いてから、ルナをつれて部屋に連れて行った。

ベッドに寝かせた頃には、もう眠っていて、起こさないように髪を乾かせた。

「それじゃ、お休み。ルナ」

布団を首辺りまで被せて、あたし達も部屋に向かった。

パタンと扉が閉じる音を背後に聞きながら、ベッドに近づくと

「きゃっー！」

押し倒されて、上にエリーが覆い被さった。

「オン」

とエリーが一言言つと、部屋全体に何かが張られたような気配がした。

プルトが言っていた、絶対防音が起動したんだ。

『風呂の前に、部屋についてももう一つ言っておく。何か、部屋の中で騒がしくなってしまうと思ったら、『オン』と唱えれば、防音の結界が発動するようにしておいた』

聞いた時は、それを使わなければいけないほど騒がしくなることは無いだろうと思っていたけど、こんな形で役に立つなんて……。

「良い鳴き声を聞かせてね？」

「はい。エリーお姉様」

そう呼ぶとお姉様はあたしの唇を塞いで、口内を激しく犯し始めた。

もっと、もっと

「はあ……はあ……／＼／」

「可愛かったわよ？プリムラ」

「あ、ありがとう……ございます／＼」

「さて、わたしは先にリビングに行ってるから、貴女も回復したら来なさい？」

「はい」

ベッドから立ったエリーの言葉に頷くと、良い子ね、と言われ、顎を持ち上げられ何をされるのかと思うのとほぼ同時に、首筋をツツと舐められた。

「あアッ！／＼／」

「ふふ。……じゃ、早く来てね？プリムラ」

一気にみんなの前でのエリーに戻って、黒さの全くない純粹な笑みをあたしに向けて、おね……エリーはオフと言って結界を解き、先に出ていった。

『あ、エリーゼ。プリムラはどうしたの？』

『ゆっくりしてたら、眠ってしまっ……一応起こしてきたので、

少し待ってれば来ると思います』

ジュード達も上がったみたいで、賑やかな声が聞こえてきた。

エリーの変わり身の早さは凄いね。

首筋を少し触れてみると、まだ濡れた感触があって、指先に少しエリーの唾液が付いていた。

「ん・・・ちゅぱ、は・・・」

暫くその指先を舐めて、とりあえず満足したところで、あたしも部屋を出てリビングに向かった。

苛められたら、苛められるだけでもっと苛めて欲しくなっちゃうなあ・・・。

と思いながら。

バーベキュー

「はい、ご飯できたよ」

呼び掛けると、みんな一斉に返事をしてテーブルに着いて、それを見ながら、なんか一家のお母さんみたいなあ、と思った。

まあ、できたって言うてもバーベキューだから串に野菜とお肉を刺していくだけなんだけど。エリーとルナ、セルシウスが手伝ってくれたから、結構早く準備できた。ミラも手伝ってくれたけど、見ていてとても危なっかしかったから、レイアと一緒ににおにぎりを作ってもらった。

味見をしたけど、中々美味しかった。

ミラってこんなに上手かったっけ？レイアは、戦いの後、宿の手伝いをしていたから納得だけど。

・・・細かいことはいっか。

串を金網の上に並べて、焼き上がるまでの間、みんなはおにぎりを食べていた。

「お、美味しいな」

「ホントだ。これレイアが作ったの？」

「ううん、そっちはミラだよ？」

「そうなのですか？」

「意外だな」

「だね」

「どういう意味だ。私だって握り飯くらいはできるのだぞ？」

少しむくれ顔に成りながら抗議するミラにみんな笑みを浮かべる。

「皆さん、お肉も焼けましたよ？」

お肉の様子を見ていたルナがそう言って、みんなに配る。

串から抜いて、お皿に乗せたり、口で直接抜いたり、塩をかけたかと思いきいの食べ方をしていた。

ホワイトはプルードがどこから用意したのかわからないけど、大きなお肉にかぶりついていた。

セルシウスはやはりと言うかなんとと言うか、氷属性だから熱いのが苦手みたいで

「ふー、ふー」

と少し冷ましてから食べていた。

その様子を見てると、

「プリムラ」

とエリーに呼ばれて、見ると、箸でお肉を持っていた。

「口、開けなさい？」

小声で命令されて、あたしは言われた通り口を開いた。

そして、お肉を口に入れられてから口を閉じると、ゆっくりと箸が抜かれた。

「美味しい？」

租借しながらくんと頷くとエリーも満足そうに頷いた。

「皆、今日はどうする？宿に戻るか？」

串を持ったままプルートがみんなに聞くと、最初にレイアがここに泊まると言った。みんなも、そのつもりの様で、異議なしと言った感じだ。

あたし達ももちろん異議はない。

「では、今日は皆泊まりだな。女将には我が伝えておこう」

こうして、今夜は全員でお泊まり会をすることになった。

トランプ

「やったー！1抜け！」

持っていた二枚のトランプを元気に中央において高々と声を上げたのはレイア。

今あたし達は、リビングでトランプをしていて、ゲームは多分トランプの中で一番有名な気がするババ抜き。たった今レイアが言った通り、1抜けした所。

これで5回連続だね。

ババ抜き、大富豪、七並べ、じじ抜き、で今のババ抜き。

二位に違いはあっても、一位はずっとレイア。

「強いね、レイア」

「へっへっん。このまま独走だよ」

胸を張って言うレイアは結局その後もトップを独走だった。

「時間も時間だし、次で最後にする？」

「そうだな・・・ルナもそろそろ眠いだろう」

ミラの言った通り、ルナはまた船を漕いでいた。

多分次のゲーム中に寝るかも。

「じゃ、最後だし、一位の奴は誰かに好きなことができるってことにしようぜ？」

『！』

アルヴィンが言った途端女性陣の目が一気に変わった。ルナはこくりこくりしてるけど……。

「それで、何するの？」

「神経衰弱でもしますか？」

「最後にしんどの持ってきたな」

まとめていたトランプをテーブルにばらまいて、表になっていた物を裏にしてシャッフルして準備完了。

「それじゃあ！じゃ〜んけ〜ん・・・ポン！」

結果あたしから始めることになり神経衰弱が始まった。

この人数なら十分くらいで終わるかなと思っていただけ、なぜか一時間も掛かった。

ルナは予想通り、とっくに寝てしまっている。

「なんで、こんなに時間掛かるんだろう？」

「さあな。女性陣が原因なのは間違いないが・・・」

ブルートの言う通り、なぜか女性陣が張り切っていて、その所為なのかどうかは分からないけど、時間が掛かっている。

ゲームはその後十分くらいで終わって、結果はエリーの勝ち。

「それで？エリーゼは誰に何をやるんだ？」

セルシウスの問いにエリーは、

「みんなには内緒です」

と笑って答えた。

トランプを片付けて、ルナをシャドウに運んでもらい、あたし達もそれぞれの部屋に戻った。

「それじゃ、服を脱ぎなさい？」

「へ・・・あ、はい」

入った途端言われたから、少し反応が遅れてしまったけど、服を脱ぎ始める。

「次はこれを目に巻き付けて」

そう言って渡されたのはエリーの服に結ばれていたりボンだった。

受け取って目に巻き付けて後で結ぶと、視界が完全に塞がれた。

そのままベッドに寝なさい、と言われてなんとかベッドまで歩き、横になる。」

シユル、と何かを解く音が聞こえて、何も言われずに手首を後で結ばれた。

もうこの時点であたしの胸は高鳴りっぱなしになっている。

「わたしが良いって言うまで耐えられたら、ご褒美をあげるから頑張りなさい?」

「はい、お姉様／＼」

「ふふ、ホントに良い子ね」

そういってお姉様はあたしの胸から下に向かって舌を這わせた。

「はっ、あアっ!／＼」

「褒美」

「ああ、そうだ。結界は張ってないから、あまり声を出すと気付かれるわよ？つて、聞こえてないわね」

「はあ・・・はあ・・・／／／」

「ちゅ、んん・・・れる・・・ちゅぱ」

「あつ、はあ・・・あ、お・・・ねえ・・・さまあ・・・もつとお／／／」

目隠しの所為なのか、感度が今までよりも高くなっていて、少し舌先が触れただけでも達してしまいそうになる。でも、言われた通り、賢明に我慢してなんとか抑えるけど、それをお姉様は見越しているみたいに攻めてくる。

これ以上されたらダメと言う思いともっと苛めて欲しいという感情が混ざってしまって、自分でもなにがなんだか分からなくなってきた。

「少し五月蠅いわね。んっ」

「んっ」

口を塞がれて、舌を強引にねじ込まれ、激しく攻められる。

「ちゅ、ん・・・は・・・れる、ちゅぱ」

「んあ……ふ、んん……ちゅ、あ……もっるお……んんっ
／／／」

「は……舌、出しなさい」

「ふあい／／／」

「じゅるる…！」

「んんん！／／／／」

「ぶっ」

「ふ……ん／／／」

「あゝあ、耐えられなかったわね？それじゃ、今日はご褒美はなし
ね」

「あ、そんなあ／／／」

ただでさえ体中メチャクチャにされて限界が近かったのに、あんな
に舌を吸われたら耐えられないよ。

「でも、朝まで可愛がってあげるわ」

「あ／／／」

耳元で囁かれ、また胸が高鳴る。

「我慢しなくいいわ。好きなだけ達しなさい？」

「え？いいんですか？」

「ええ、貴女の弱い所をずっと苛めてあげる」

「そんなことされたら、気絶してしまいますぅ／＼／」

「そしたら、また苛めて目を覚まさせてあげる」

「はぁ・・・ありがとうございます／＼／」

もうあたしにとってはそれこそご褒美だ。

「それじゃ、始めるわよ？」

「はい／＼／」

そう言ってお姉様は、口をまた塞いで指を下に向かって滑らせて、股の所で止まり、少ししてから激しく動かし始めた。

「んんんん！／＼／＼／」

気付かれた・・・

「プリムラ、起きなさい。もう朝よ?」

「・・・ん・・・あ、おはようございます、お姉様」

「もう、すっかりその呼び方が定着したわね。みんなの前で呼ばないように気を付けなさいよ?」

「はい、お・・・エリー」

「もう・・・。本当に大丈夫?」

「多分。あたし、シャワー浴びてくるから、先に行ってもいいよ?」

エリーは分かったわ、と言っていつの間にか着替えていた寝間着から、プルートの用意した服に着替えていた。形はいつもエリーが着ているのと同じだけど、色が変わっている。淡いピンク?って感じかな?

よく似合ってる。

部屋に備え付けられている、普通サイズのお風呂に入ってシャワーで体を流して、すぐに上がった。服を用意するのを忘れていたから、タオルを巻いてクローゼットを見ると、あたしの服もエリーと同じように色違いの物が入っていた。

リアルオーブを左ポケットに入れて、枕もとに目を向けると昨日あたしが脱いだ服が、エリーがたたんでくれたのか、綺麗においてあった。

ありがとうございます、お姉様。

タオルを籠に入れて、服を着て、部屋を出る。

その時丁度、隣の部屋の扉が開いてセルシウスが出てきた。

「あ、おはよう、セルシウス」

「ええ、おはよう、プリムラ」

セルシウスは挨拶をした後、こちらに近づいてきて、身を屈めてから耳元で

「昨日は可愛かったわよ？」

と言った。

「え!？」

「ふふ。まさかプリムラがあんな声を出すなんてね。でも、今度からは結界を張ることをお勧めするわ？」

「・・・ミラ達にも聞こえたかな？」

「多分その心配は無いわ。貴女途中で気絶したのか、声がパツタリ聞こえなくなっただし、ミラは眠りが深いでしょ?レイアも寝たら朝

まで起きないし」

「そっか・・・良かったあ」

これでミラたちにまで聞こえてたら、あたし当分みんなと顔を合わせられない。

リビングに行くとまだエリーとローエンしかいなかった。

流石おじいちゃん。朝は強いね。

「おはようございます。プリムラさん、セルシウスさん」

挨拶を返すと、ローエンは紅茶を飲むかどうか聞いてきたらから、あたしはミルクティーを頼んだ。セルシウスはカフェオレ・・・って紅茶に入るのかな？

まあ、いいか。

エリーの隣に座って、外を見ると、ホワイトはお腹を上に向けて寝ていた。どうやら、ここにいる時は完全に気を抜いているみたいだ。ローエンが淹れてくれたミルクティーを右手で持ち、パーカーのポケットに手をつっ込んでいすに背中を預けリアルオーブに触れて、エリーと共鳴する。

『どっかしたの？』

『昨日、結界を張ってなかったんですか？』

『わたしは最初に言ったわよ？』張ってないから声を出すと気付かれるわよ』って。貴女には聞こえていなかったみたいだけど。何かあったの？』

『セルシウスに気付かれました。ミラ達には多分気付かれてないと思いますけど』

『でしょうね。貴女以外と早く気絶したもの。お陰で退屈だったわ』

『う・・・すみません』

『まあ、思う存分舐め回したけど』

「っ！げほっ、ごほっ！」

まさかそんなことされていたとは思ってはおらず、驚いたからミルクティーが気管に入り込んで咽せてしまった。

「大丈夫か？プリムラ」

「けほ・・・うん・・・だいじょうぶ」

「少し熱かったですか？」

「ううん、大丈夫だよ。ごめんね？」

とりあえず落ち着いた所で、

『なんてことしてるんですか!？』

とリアルオーブと通して言つて、

『いいじゃない。貴女だって弄られるの好きでしょ？美味しかったわよ？』

と返ってきた。

『今度からは意識がある時にしてください』

『もちろん。やっぱり鳴き声聞かないとこっちも気分が乗らないし・・・。そろそろみんな起きてくるわね。切るわよ？』

『はい』

共鳴を切つて、暫くセルシウス、ローエンと話していると、お姉様の言った通りリビングの扉が開いてジュードが入ってきた。

「おはよう、ジュード」

「うん、おはよう。・・・やっぱり昨日疲れたのかな？」

見渡してジュードは一言そう言った。

「かもしれませんか。まあ、ゆっくりお待ちしましょう」

「そうだね」

それからジュードもローエンに紅茶を淹れてもらって、飲み始めた。

今日は何か起きるかな？

「こちらでの一日、あちらでの一日」

『いただきまーす』

みんなで手を合わせて朝ご飯が始まり、今日のことを話し合う。

「行きたい所があればここからどこへでも行けるが、それでは旅行にならないからな・・・」

「だよなあ・・・。まあ、気の向くままに進んで行けばいいんじゃないか？時間はかなりあるんだしよ」

「だよね。こっちで一日経っても、リゼ・マクシアでは十秒ってことは、まだあっちでは一日も経ってないってことだし」

ヴォルトの言葉でそういえばそうだったな、と思い出した。こっちに来て一ヶ月くらい経つけど、向こうではまだ一日も経っていない訳で、多分こっちで一年くらい過ごしてやっとあっちで一日が経つくらいなんだよね？

計算は昔から苦手なんですよ・・・。

数学は万年2だったからね・・・。

まあ、それはいいとして。

「じゃあ、今日はディライカに戻って、そのまま出発する？」

「そうだな・・・そろそろ、他の場所も見てみたいし、もしかしたら行った先でまたユーリ達の様な者達にあえるかも知れん」

「イルとライにもね。お父さんは見つかったかな？」

「そういえば、ここに旅行に来るきっかけになったのはあの二人でしたね？元気にしているでしょうか？」

「確かあの二人は、人間と魔物の間に生まれたと言っていたな。ならば、それだけ寿命も長いのだろうか？」

「それは、どういふことでしょうか？」

シャドウの言葉にローエンが疑問を抱いた様で、そう聞いた。

「以前オレ達がこちらから、リーゼ・マクシアに戻って、二ヶ月は経っている。ざっと計算して、あちらで一日が経っている間にこちらでは約一年が経っていると考えれば、後は単純な計算で済むだろうっ？」

「二ヶ月、約六十日。だから、こっちでは六十年位経ってる、ってことですよ？」

「そうだ。あの二人が人間と魔物の子だからと言っても、長寿とは限らないだろうっ？」

セルシウスの答えにシャドウは頷きそう言った。

「イルとライ、あの時見た目が二十そこそこだったよね？」

「じゃあ、今は八十ってこと？人間で考えたら、もうそんなに動き回れる歳じゃないか・・・」

レイアとジュードがそう言って、あの二人の八十近い姿を想像してみたけど、全然浮かばなかった。何となくだけど、寿命は人間よりも長いんじゃないかな？

「お前達が言うイルとライと言うのは、ハーフエルフやダークエルフではないのか？」

「違うよ。本人達が言ってたから」

プルートの質問にあたしが答えると、

「そうか・・・こう言うてはなんだが、そんな者達がいたとはな」とプルートは他になんと叫びたらしいのか、分からないと言った感じだった。

でも、確かにそういう言い方しかできないかも知れない。

「それで、結局今日はどうするんですか？」

『あ・・・』

お姉様に言われて、あたし達は論点がずれていることに気付いた。

さらば、ディライカ

「それじゃ、出発かな？」

「うん」

お姉様に続いて、みんなも頷く。

朝ご飯を食べた後、あたし達はディライカに戻ってきて、宿の女将さんに挨拶をした。笑って、またいつでも来なよ、と言ってくれたのは、素直に嬉しかった。

その後、ユーリ達の所にも行ったけど、パティとフレンの二人しかいなかった。

「ユーリ達はいさっき仕事に行ったばかりだね。入れ違いになっちゃったね？」

「それにしても、もう行ってしまふのか？名残惜しいのう」

パティはそう言って、あたしの手を握ってきた。

「でも、また来るからさ？そんなに悲しまなくても良いよ？なんなら、お土産持ってこようか？」

「よいのか！？」

「うん。何がいい？」

「ではの〜」

あたしとパーティが話している間、ミラ達大人組はフレンと何か話していた。ちらつと聞こえたのは、手合わせと言葉。多分今度来たら戦おうとか、そんな感じの話をしているんだろうね。

「それじゃ、二人とも元気でねー!」

「お主らものー!また絶対来るのじゃぞー!」

「分かってるよー!お土産楽しみにしててね!」

「夜はちゃんと歯磨きするんだよー!」

「そこまで子どもじゃないよー!」

上から順に、レイア・パーティ・あたし・フレン、で最後にまたあたし。

挨拶をして、あたし達は手を振りながら、ホワイトの待つ所まで向かった。

魔狩りの剣・1

「一番近いのは、ノエラの街だな。漁業が盛んな街で、船もあるが、そこに行くか？」

「他には、どこかないの？」

「ここからではな・・・ノエラからなら、様々な所に行けるが」

「では、そこでいいのではないか？ゆっくり探して行けばいいのだからな？」

「それもそつか。みんなも、ノエラに向かうってことでいい？」

ミラに言われて、あたしは頷き、みんなに確認すると、頷いた。

ホワイトには、途中で誰かに見つかったりしたら危ないから、見つからない位の高さまで上がって、付いてくるようにしてもらった。

ブルートの力なら結界で姿を隠すことができるみたいだけど、気配もなにもかも隠してしまうから、あたし達まで、どこにいいのか分からなくなってしまうと言つので、やっぱりやめてもらった。

「ごめんね？中々一緒にいられなくて」

そういうと、ホワイトは首を横に振って、一声鳴いた。

「ふふ、あたし達もだよ？貴方と再会できて嬉しい」

『グア〜』

また一声鳴いて、ホワイトは翼を広げて飛び立った。

「！フツ！」

その時ブルートが何かに向かってデモンズランスを投げつけた。

バキイイイン！

命中して、砕けたのはブーメランの様な形をした武器だった。

「ホワイト！急いで上昇しろ！狙われているぞ！」

『グア！』

ブルートに言われた通り、ホワイトは速度を上げて上昇し、瞬く間に見えなくなつた。あれなら、もう誰にも手を出すことはできない。

それを見届けたブルートは武器の飛んできた方を睨み付け、あたし達のその方向を見る。

そこには大剣を担いだ大男と、猫背にフードで顔が隠れている男、そしてあたし達と殆ど変わらないような、女の子がいた。

魔狩りの剣・2

「お前達、なんのつもりだ？」

「それはこちらの台詞だな。お前達こそ、我等の仲間をなぜ攻撃した？」

「仲間？あの魔物がか？はっ！笑わせるな！あいつはホワイト・ドラゴンだろう！」

フードを被っている男の質問にプルートの答えると、そいつは嘲笑うように言った。

「だからどうした？」

「俺たちは魔物を狩る者だ！この世全ての魔物をな！」

フードの男はそう言って天を仰いだ。

「・・・くだらんな」

それを見たプルートは吐き捨てる様に言った。

「なんだと！」

そう叫んだのは女の子で、今にも攻撃してきそうだ。さっきの武器の形からして、遠距離が得意なのかも知れないけど、その武器が無くなっても強気ってことは、術かなにか使えるのかな？

後ろにいる大男はまだ何も喋ってないけど、ちゃんと起きてる？

「お前達がどう思おうが、俺たちはあいつを狩る。邪魔をするな！」
フードの男がそう言って、あたし達の方に飛びかかってこようとした。

「デモンズランス」

「なに！？」

三人を取り囲むように槍が出現する。

この光景を見るのも久し振りだな、と的外れなことをあたしは思っていた。

「お前達が魔物に対してどの様な思いを持っているのか、そんなことはどうでもいいが・・・手を出す相手を間違えたな？」

動けば殺す。

ブルートは十分な殺気を込めて三人に言った。

「ブルート、あの大男」

「分かっている。あの者なら、これくらいは防ぐことが出来るだろうが、何故か動かない」

「何かを狙っているのでしょうか？」

「そんな風には見えませんが・・・」

ミラが大男を見て、言って、プルートの答えると、ローエンも疑問を口にした。

でも、ルナの言う通り、そんな風には見えない。

『プリムラ、貴女あの子が可愛いとか思っていないでしょうね？』

『いきなりなに言ってるんですか！そんな訳ありません！』

『ならいいわ』

突然共鳴してきたお姉様に、こんな時になに言ってるんですか、と思いつながら答えると納得してくれた。

「で、どうする？あいつらもこの状況で下手に動きはしないと
けだよ」

「このまま進むさ。動けば槍を飛ばせばいい。行くぞ？」

歩き出したプルートについてあたし達も進む。

「ち、次会った時は本気であいつを殺しに掛かるぞ？」

「やってみなさいよ？その時はあたしもあんたを殺してやるから」

「」「ッ！」「」

すれ違いざまに言ってきたフードの男にそう返すと、女の子だけでなく、フードまで肩を跳ねさせた。

大男はチラッとこちらを見ただけだ。

そのままあたし達は三人の横を通って、改めてノエラの街に向けて出発した。

『お姉様、あたしあの女の子を苛めてみたくなりました』

『あら、貴女、Sっ気もあるのね？』

『お姉様相手ならM専門です！』

『分かってるわよ』

ノエラへ・一日目

『それにしても、あの人達は魔物に何か恨みでもあるのかしらね?』

『例えあつたとしても、ホワイトに手を出したのは許せません』

『ええ。精霊術の練習、始めた方がいいかしらね。少し位なら、テイポがいなくても制御は出来るだろうから。てつだ『もちろん』・・ふふ。そろそろ切るわよ?』

『はい』

その後直ぐに共鳴は切られた。

さて、鈍ってないと良いけど。

三人から十分離れた所で、ホワイトがちゃんと付いてきているかをプルートに聞くと、問題なく付いてきている様なので安心した。

ノエラには徒歩で五日程掛かるようだ。

さて、その一日目の昼食後、あたしとお姉様は早速特訓を始めることにした。

「急にどうしたのだ?」

「また、あの三人みたいな奴らが来たら、今度は戦いになるでしょう?その時勘が鈍ってたらいけないから、今の内に取り戻しておこ

うと思つて。エリーもテイポなしで精霊術を使う練習をするつもり
みたいだから、丁度良いかなんて」

「成る程。そういうことなら、ジュード、私たちも久し振りにやっ
てみるか？」

「うん・・・そうだね。やるうか」

あたし話を聞いて、ミラとジュードも特訓をすることにしてみた
い。

レイアとルナは降りてきたホワイトと遊んでいて、ヴォルトとセル
シウスは横に並んで寝転がっていた。ローエンはシャドウと、アル
ヴィンはプルートと話している。

「フレアボム！」

「！ハッ！」

ミラとジュードは既に特訓を開始していた。

「それじゃ、あたしたちも始めようか？」

「うん。最初は下級から、一番弱い力で行くから」

「分かった」

そう言つてエリーは詠唱を始めて、エリーの持つ精霊術では一番威
力が低いネガティブゲイトを発動した。

やっぱりティポがないからか、範囲も狭くなっているから、簡単に避けることが出来た。

「だんだん、上げていくから」

「うん。あたしはとりあえず避けるのに専念するから」

それから、エリーはネガティブゲイトを連発してきた。元々の才能もあったからか、これに関しては殆ど前と変わらない威力になって、気が付くともう夕方になりかけていた。

「少し休憩したら、出発するからな？」

「うん」

プルートに言われて、あたしとエリーは少し休憩することにした。

『この調子なら、直ぐに前みたいに来るかも知れませんか？』

『そうだといいけど。・・・でも、ティポがないから、リベール
ゴランドはどちらにせよ出来ないわ。あれはティポが要の技だから』

『ティポなしで発動したら、どうなるんですか？』

『多分、暴発するわね。杖にチャージしても、多分杖が耐えられないし・・・』

『難しいですね・・・』

『そうね。そろそろ行きましょつか？』

『はい』

立ち上がりプルートの達所に行き、またみんなで歩き出す。

『明日からも頑張りましょつか？』

『ええ』

ノエラへ・二日目

「は、ん・・・ちゆる、くちゅ、はあ・・・ん・・・おねえさまあ
／＼／」

「ん・・・ちゅ、ふ、ちゅぷ、れる・・・はあ・・・」

口内を攻め立てるお姉様の舌に自分の舌を絡めると、

「必死で可愛いわね。ん、じゆる・・・ちゅ、は・・・」

そう言つて、もつと絡めてくれた。

ノエラに向けて出発して二日目。今日も特訓をして、お姉様は精霊術をかなり使いこなせるようになった。ローエンとプルートも手伝ってくれたことが大きいと思う。

夕食の後、その辺を散歩してくると言つて、お姉様と二人で人気の無い林に向かうと、その途端押し倒されて服の中に手を入れられた。そこからはもうずっと、お姉様のターンであたしのターンは一向に回ってこない状況が続いた。

「ちゅぷ・・・ん」

「ん・・・んく」

唾液を流し込まれてそれを飲み込むと、お姉様が口を離し、銀の糸

が引かれた。

「……そろそろ戻らないと、いけないけど、どうしたい？」

「んっ……もっと……苛めて欲しい、です／＼／」

「でしょうね。でも、今日はここまでよ。セルシウスは知ってるから大丈夫でしょうけど、だからと言って探しに出ようとする誰かを止めるとは思えないわ」

「それは……ん、ちゅぱ、ちゅる……／＼／」

そうですけど、と繋げようと思った所で人差し指を口に入れられ、それにしゃぶりつく。

「苛めて欲しいなら、次はもっと苛めて上げるから、今日はこれくらいで我慢なさい？」

「ふあい……わかりました／＼／」

「みんなの所に行くまで舐めてて良いわよ？」

「ありがとっございまふ／＼／」

片手で起用に乱れた服を直して、お姉様は立ち上がった。あたしも慌てて立ち上がると、

「ほら」

とまた指を指しだしてくれた。

また口を付けようとしたら、寸前の所で躲され次もまた同じようにされた。

「おねえさまぁ・・・いじわるしないでくださいいゝ／＼／」

「ふふ。冗談よ」

今度はちゃんと口に啜えさせてくれたから、言ってくれた通り、ずっと舐めていた。

歩きながら体も弄られたから何度か達してしまった。

ノエラへ・三日目

「あ、違った」

「え、何が？」

「イルとライ、もうとっくに百歳越えてるよ」

『はっ？』

ノエラへ向けて出発して、三日目の朝、以前会った時にした会話を思い出して言うと、お姉様以外が変な声を上げた。

「ほら、思い出してよ？あの時二人は自分たちが生まれたのは五十年程前って言うてたでしょ？」

そう言うと、みんな今度は思い出したように声を上げた。

「確かに言っていたな」

「だね。なんで忘れてたんだらう？」

ミラの言葉にジュードが賛同してみんなも納得したみたい。

「まあ、それは今関係ないけど。そろそろ朝ご飯にしようか？」

ちなみにこの会話中、あたし達は一步たりとも動いておらず、あたしは朝ご飯の準備をしていた。適当に拾ってきた拳大の石を集めて、

中心に薪を集めてミラにフレアボム（弱）で火を付けてもらった。

シチューの材料を入れた鍋を火の上に乗せてお玉でぐるぐるぐる。

お椀に入れていって、みんなに配る。

「それじゃ、いただきます」

みんなも続いていたいただきますと言って、シチューとパンを二つずつ位取って食べ始める。

今度する時は最初から入れておこうかな？

自分で作っておいてなんだけど、結構な熱さだったから、舌を少し火傷してしまった。舌の火傷って結構長く残るから嫌なんだよね・
・ずっと変な感じがするし。

「大丈夫？プリムラ」

「うん、大丈夫。ありがとね？」

「少し冷ますか？」

ヴォルトが心配してくれたことを嬉しく思いながら、言っと、次はセルシウスがそう言ってくれた。

「セルシウスがやったら凍っちゃうんじゃない？」

「確かに」

「ふむ。お前達二人を凍らせてもいいが？」

「「ごめんなさい」」

レイアとアルヴィンがそういうと、セルシウスが言っ、二人は綺麗に揃って謝った。

「ほっほ。やはり賑やかな朝食はいいですね」

「ですね」

ローエンとルナが老夫婦っぽい会話をしているけど、まあ、いいか。

「ホワイトは昨日の夜からずっと寝ているが・・・これは」

「ああ、油断しすぎだな」

『グウ・・・グウ・・・』

プルトの言う通り、ホワイトはお腹を真上に向けて眠っている。どれだけリラックスしているんだか・・・。まあ、それだけあかし達と一緒にいる時は安心できるってことだよな？

「ふう、ふう」

今度はちゃんと冷ましてから口に入れたけど、それでもまだ少し熱かった。あたしってこんなに猫舌だったっけ・・・？

「プリムラ、もう少しちゃんと冷まさないと」

「うん・・・十分してるつもりなんだけどね・・・」

「貸して」

返事をする前にエリーにお椀を取られた。自分のお椀を落ちないようにしてから、あたしの分を掬い上げ冷ましてくれた。

「はい」

「あ〜ん」

口に入れると今度は丁度良かった。

流石お姉様。

『今度は熱湯プレイでもする?』

「げほっ!ごほっ!」

「大丈夫か!? プリムラ?」

「だ、だい・・・けほ・・・じよぶ」

あんまり大丈夫じゃないけど・・・。

『冗談よ。毎回真に受けるから、飽きないわ』

『お願いですから、いきなり繋いで来て、とんでも発言しないでください』

「プリムラ、最近咽せること多いね?」

それをさせている本人が何を言っているんですか……。

ノエラへ・四回目

「ヴァイオレントペイン！」

「ッ！」

足下から空を覆うようにして襲ってくる闇の触手を躲し、エリーに向かつて特攻する。杖で弾かれた所で、今日の特訓はお終いにし、まだ修行しているプルートとレイアを見る。なんか意外な組み合わせな気がするな……。

「でやあっ！」

「フッ！」

ギイン！

棍と剣がぶつかりあって甲高い音を立て、暫し二人は睨み合う。

晩ご飯は今日はローエンとセルシウスが作ってくれている。豪勢にステーキだよ。どやって作ってるかは聞かないで。

「今日はこれくらいだな」

「だね。お腹すいた」

二人もそこで切り上げて、みんなの所に戻ってきた。

ジュードは珍しく変な時間に眠っている。どうしたんだろ？ね？ミラはミラでそんなジュードをつついたりして弄っている。ルナとヴォルトはホワイトと戯れていて、シャドウはその近くで瞑想？している。

アルヴィンはそこら辺に寝転がって空を眺めている。

「ローエン、セルシウス、あとどれくらいで出来る？」

「もう出来ますよ？皆さんを呼んでくれますか？」

「うん」

言われて、あたしはみんなに声を掛けた。

円形状に座って、夕食開始。

『いただきます』

食事中

『じいちゃんまで』

食事終了。

片付けを終わらせて、各自寝るまで自由に過ごす訳だけど、ジュー

ドはさつき寝てたからか、全く眠気がこないみたい。

「とういわけで、5?走をします」

「え?どうして?」

「いや、寝てたから眠気がこないんなら、疲れたら眠くなるかな・
・と。ほら、準備して」

「あ、することは決定なんだ」

もちろん。

『元気よね?貴女』

『お姉様もやります?』

『遠慮するわ。別のことならやりたいけど、今日はなんだから疲れ
たし、もう眠るわね?』

『はい。お休みなさい』

『お休み』

お姉様と挨拶をして、

「さ、行くよ!ジュード!」

スタンバイする。

「レイア、合図お願い」

「オッケー。よーい、ドンー！」

「ゴー！」

「え？合図早くない？」

後ろで何か言っているジュードを置き去りにして、あたしは走り出しました。少ししてからジュードも追いかけてくる。

まあ、5？なんて言っただけど、そんなの何となくだからね。適当に走っていれば疲れも出てくるだろうし。

「プリムラ、ホントに元気だね？」

「それが取り柄だからね」

「そっか」

そんな他愛の無い会話をしながら、あたしとジュードは暫く走った。

で、気が付くと結構遠くまで来ていたみたいで、様子を見に来たルートにちよつと怒られて連れ戻され、ジュードは上手い具合に疲れたのか、汗を拭き、着替えてからすんなりと眠りに入った。

あたしも汗を拭いて着替え、エリーの隣に転がった。

目を閉じると、誰かに引き寄せられ、唇を塞がれた。

「ん」

「ちゅ……は……」

短いキスが終わり

『あまり心配掛けないの』

と言われた。

ありがとございませす。お姉様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4473y/>

プリムラー行冥界旅行記

2011年11月20日21時43分発行